

豊後國分寺跡

昭和51年度発掘調査概報



1977

大分市教育委員会

例　　言

1. 本書は大分市教育委員会が国・県費の補助を得て実施した
豊後國分寺跡緊急発掘調査の昭和51年度調査（第三次）の概
報である。

2. 調査團の構成は次のとおりである。

調査主体者 大分市教育委員会

豊後國分寺跡調査委員会委員 池見 喬（大分市教育委員会
教育長、調査團長） 渡辺澄夫（別府大学教授） 兼子俊一
(大分大学講師) 岩男 順（大分大学教授） 中野幡能（
県立芸術短大教授） 富来 隆（大分大学教授） 賀川光夫
(別府大学教授) 沢村 仁（九州芸術工大教授） 小田富
士雄（北九州市立博物館） 衛藤 久（県教育庁文化課長）
森 信男（市教委社会教育課長）

調査指導者 沢村 仁・小田富士雄

調査員 後藤宗俊・真野和夫・藤田和夫（以上県文化課）
安部幸人・杉崎重臣・小野雅途・羽田野光洋（以上大分市教
育委員会）

調査補員 別府大学学生

3. 本書の執筆は、沢村・小田委員の指導を得て真野が担当
し、図面製図は羽田野が行った。

序 文

豊後國分寺跡の発掘調査は、昭和49年、昭和50年とその成果をあげ、寺域及び伽藍配置等の確認ができました。

昭和51年度の発掘調査も、諸先生方、県教委及び地主をはじめ地元の方々のご理解ある協力により数々の成果を得て過日終了いたしました。

今回の調査で寺域と主要伽藍の性格の確定にさらに大きく前進することができました。次年度は未調査地区の調査をすすめ、所期の目的を果したい所存です。

以下 51年度調査の概要をまとめ報告します。

昭和 52 年 3 月

大分市教育長 池 見 喬

I 調査の経過

大分市教育委員会が国庫補助を受けて、昭和49年度に開始した史跡豊後國分寺跡の発掘調査も、今回第3次調査を終了し一応のしめくくりを迎えることとなった。

これまでの調査をふり返ってみると、まず第1次調査では現薬師堂の位置に伽藍の中核をなすとみられる建物の大規模な掘込基壇部が確認され、その後の調査を進めていくうえで重要な位置を占めることになった（薬師堂地区基壇遺構・推定金堂跡）。つづいてこれより北方水田部分のトレンチ調査によって北第1・第2遺構およびさらにその北側に礎石1個が発見された。また、現在その基壇上に觀音堂が建っている塔跡の調査では、1辺約18mの規模の基壇であることがわかった。

つぎに第2次調査では、第2遺構・回廊および南門の探索が中心となった。この調査によって、第2遺構は薬師堂地区基壇遺構の北約30mの位置にあるやや小形の規模の基壇遺構であることが確認され、講堂跡であろうと考えられた。回廊関係の調査では、薬師堂地区基壇遺構の東西に幅6m程の掘込みの版築あるいは地山削り出しの回廊基壇の基礎部分が発見されたことから、塔跡西地区・中門地区の探索へと進展し、その結果塔をとり囲む形で回廊が存在することが明らかになった。さらにこの回廊の西側に接して幅3m前後の大溝が南北150m以上にわたって掘られているという新しい事実が確かめられ注目を集めたが、溝の北限あるいは南限については今回の調査をまつこととなった。一方、南門跡に関する調査では古くより言い伝えられた場所があったことから発掘したところ、結果はそれより約35m程北側に基壇端とみとめられる石列と版築を発見した。薬師堂地区基壇の南約110mの位置である。これらの新知見によって豊後國分寺跡の中心伽藍および寺域四至についての調査はさらに歩を進めることとなった。

これらの成果を受けて昭和51年度の調査は、旧寺域の1/4を占める東側住宅地区の調査および溝遺構の南北への追究と東側での検証という目的で実施した。



国 分 寺 遠 景（中央の森が現境内、西北より）

1次・2次調査の概要

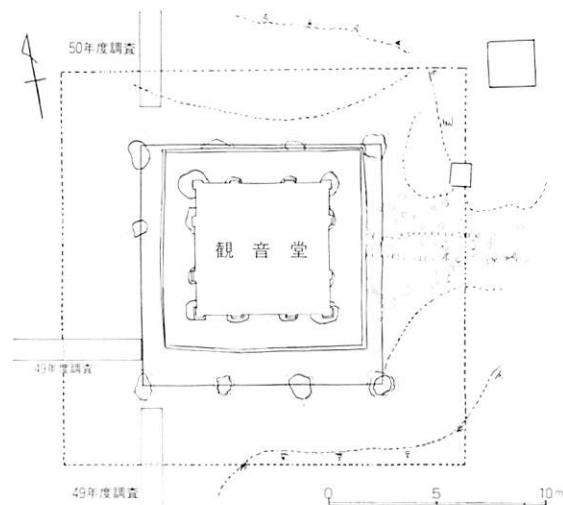
南門……伽藍のほぼ中軸線上には現薬師堂（推定金堂跡）から南へのびる市道とこれに沿う水路がある。東側はすでに密集した住宅地となっており、西側は宅地面より約1mほど高い水田がある。南門跡とみとめられる遺構はその水田部分に設定したトレンチで発見された。地山に達する掘込みの版築層である。地形の関係からごく小部分しか発掘することはできなかったが基壇端化粧の一部とみられる人頭大の栗石が並んでいた。発掘した部分は南門基壇の西南隅付近とみられるが、検出した石列はやや彎曲してN23°Wの方向を示している。また、版築によってつくられた基壇の南側に接して30cm以上もの分厚い粘土を敷いた用途不明の付属施設がある。内部には礫をつめた排水溝をもっている。礫内部から発見された土器（スリバチ片）からみて一応中世頃につくられたものであろう。南門推定遺構の推定金堂跡との距離は約110mである。

回廊……薬師堂地区基壇遺構（推定金堂跡）の東西に回廊の基礎部が遺存していることが確かめられたのは第2次調査であった。遺構は旧地形に応じて東側は黄褐色の地山に達する掘込み地業の版築を行っており、西側は地山削り出しである。その後、塔の西側地区や中門付近の調査によって、東西約150m、南北約90mの範囲が回廊によってとり囲まれることが判明した。回廊基壇の幅は約6mあり、推定金堂跡には中央部にとりつく。また、西側および南側においては回廊外側に大溝が掘られていることがわかっている。

塔跡……回廊内西側に1辺約18mの塔基壇が遺在しており、現在その上に観音堂が建っている。基壇端は栗石積み、礎石は巨大な心礎を含め8個が現存する。それらの礎石と基壇からみて、塔初層の一辺長は約11m、軒の出は約3.5mとみられる。方位はN10°11'E。基壇は薬師堂地区



回廊基壇の掘込み地業



基壇遺構と同様、地山に達するまで約1mほど掘下げて版築し、その上部に高さ約1mの基壇を築いている。

薬師堂地区基壇遺構（推定金堂跡）…………現国分寺の中心とも言うべき薬師堂の位置にある基壇遺構で、薬師堂基壇にその一部が遺存するものの、大部分は削り取られて移動された礎石が転々としている。この地区的トレンチ調査によって大規模な掘込み地業の基壇遺構がみつかった。規模は東西約32.5m、南北約22mである。軟質の黒色土を排除して地山に達する約1mの掘込みを行い、まず大形の栗石を投げ込んだあと採取してきた地山の土を表土層近くまで比較的粗雑に充填し上部になるにしたがって本格的な版築によって築いていっている。掘込部分の四至が建築物や切株によって確かめられないため中軸線方位の確定がやや不十分である。

北第1遺構…………薬師堂地区の北側に隣接する畠地にある遺構で次に述べる北第2遺構（推定講堂跡）のすぐ南側にあたる。遺構は掘立柱の抜き跡様に瓦片が集中しているところが数ヶ所発見されたもので、トレンチ内で東西2列、南北3列分が検出されたが柱穴掘り方がはっきりしない。間隔が不均等であるなど建築跡としてはやや疑問が残る遺構である。

北第2遺構（推定講堂跡）

…………金堂跡とみられている薬師堂地区の基壇遺構との距離30mの位置にある基壇遺構である。3枚の畠あるいは水田にまたがっており、基壇の約1/3に相当する北側部分では良好な遺存状態を知ることができた。

基壇の規模は東西約28m、

南北18mで北側基壇端には栗石列、その内側に部分的に丸瓦を連ねた上に平瓦を重ねた状態が遺存しており、また北側中央部には両端に大石を据えた幅2.3mほどの階段状の張出しが付属している。

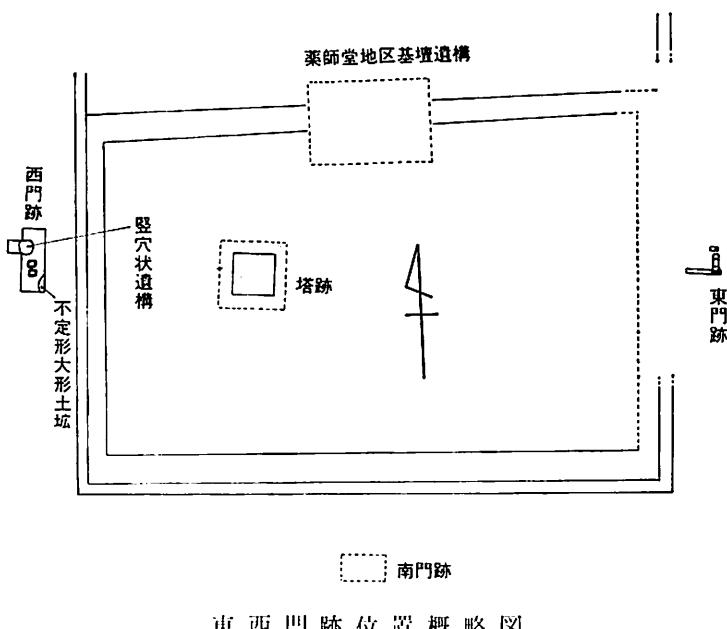
溝遺構…………塔跡西側の回廊基壇の探索中に発見されたもので、回廊基壇西側に接して掘られている。幅約4m、深さ1~2mのほぼU字形をなし、溝底付近には回廊をふいていたとみられる瓦堆積があった。第2次調査終了時には、回廊の西側部分に並行してその雨落ち溝的機能をもつというとどまらず、さらに北側へ延び全体で長さ150m以上が確認された。とくに構造的にみて、塔の真西につくられた二つの仕切りや第2遺構の西側にある位置の「コ」字状張出しなどが注意される。



II 3次調査の概要

(1) 東西門跡

第2次調査で塔の西側地区にトレンチを設けた際に大形の掘立柱の掘方が発見された。伽藍の推定中軸線から約90mの位置である。大規模な溝構造で囲まれた範囲を一応伽藍域と考えた場合、その外側にあることから付属の建築跡



であろうかなどと考えられた。また付近から縁軸陶器の発見があったこともこの推定を裏付けるかのようであった。しかし発掘の結果、大形の掘立柱が南北に二本並び門跡とするにふさわしい遺構となつた。さらに検証する意味で東の対称位置を発掘したところ、同様の大形柱穴と南北方向に並んだ小形の柱穴が発見され、門跡とこれにとりつく柵列であろうと推定された。東西両遺構の距離は約182m、また両者を結ぶ線は塔中心を通ることが判明した。

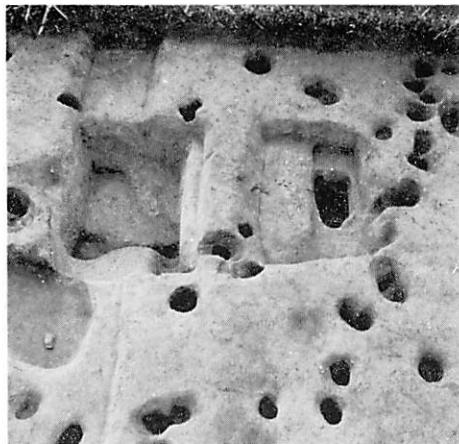
東門跡は $180 \times 90(+) cm$ の大きさの掘立柱掘り方およびその北側へ連なる3個の小形柱穴がその遺構である。南側門柱の柱穴は家屋のため確認することができなかった。掘方は礫の入った黄色土の地山を1.2mほど掘込んでつくり、その東北隅を利用して直径約50cmの柱を立てていたとみられ、抜き跡から系切り底の灯明皿が出土した。この門柱にとりついて北側に延びる柵列とみられる柱の径約25cm、掘方径約50cmの小形の柱穴列は、門柱より約90cm内側（中軸線寄り）に並ぶ。門柱を含む相互の心々距離は1.8—2.0—2.0mである。

なお、この遺構から東へ数メートルのところに柱座等の造出しあらないが古くより東門の礎石と伝えられている石がある。ちょうどブロック塀の下にあたり住宅の間に挟まれた場所で確かめるすべもないが、位置を踏襲しながら幾度かの建て替えがあったのであろう。

西門跡は前述のように推定中軸線より約90m、塔中心からの距離約60mに位置してい

る。また、西側回廊の外側に接する大溝との距離は約9mである。

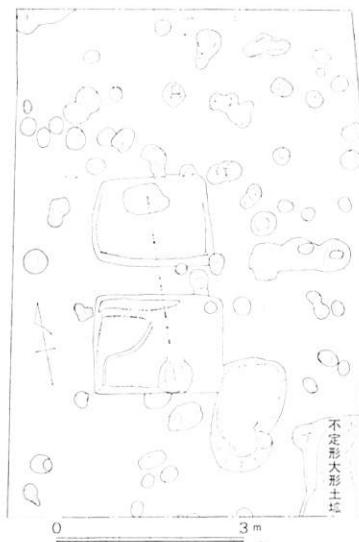
遺構は南北に約50cmの間隔でつくられた大形柱穴2個からなる。掘方の大きさは南側が 2.1×1.6 mの整美な長方形、北側のものが 1.8×1.5 mのやや不整形な長方形を呈し、黄褐色土(地山)を深



西門跡

き締めていた。両者の心々距離はおよそ2.9m、中心を結ぶと中軸線の方位よりもかなり西へ振る。これら2個の大形柱穴の周囲には小形のピットが多数あり中には柱穴とみとめられるものもあるが、東門跡で検出されたように明らかに柵列としてとらえうる並びを見出すことは困難である。

なお、西門跡の調査では南北22m、東西6mの発掘区を設定しており、門跡のほか後述する竪穴状遺構や不定形の大形土壙などが発見されている。



さ1.2mほど掘り込んでいる。これに直径約50cmの門柱を埋め込み周囲を固く叩



発掘区全景(北より)

(2) 回廊

第2次調査

によって薬師

堂地区基壇（

推定金堂跡）

中央部へ取り

つき、塔を内

側へとり囲む

大規模な回廊

の輪郭が一応

明らかにされ

た。今回の調

査の主眼は家

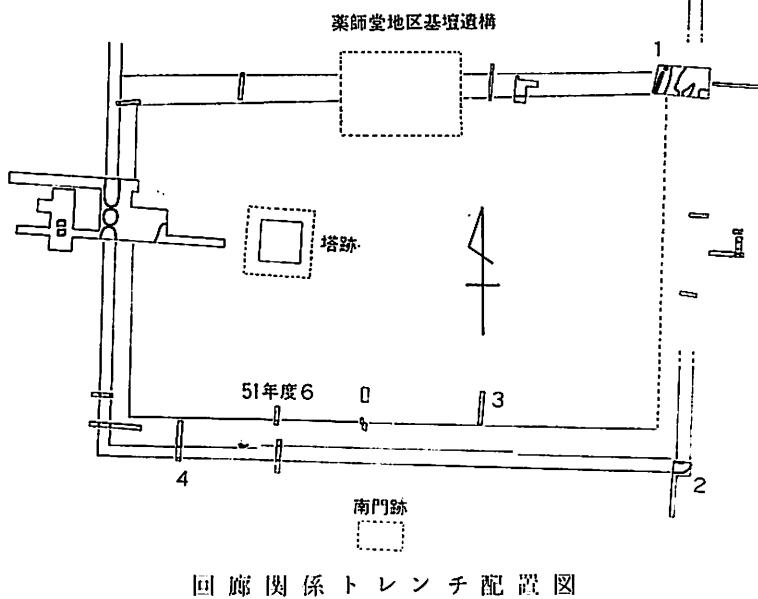
屋の多い東地

区のうちでこれを確認し、できれば1隅をおさえたいと考えた。また、第2次調査で中門へと向う回廊の地山削り出し基壇上に一部版築がみられたのでこれを確かめるためトレンチを設定した。調査の結果、回廊東南隅については外側をまわっている溝跡を検出することができてからうじてその位置をおさえることができたが、東北隅は回廊遺構はまったく遺存していなかった。また、基壇上の版築については、回廊南側の溝を半分ほど埋めてその上部を版築した改築の状態を知ることができた。

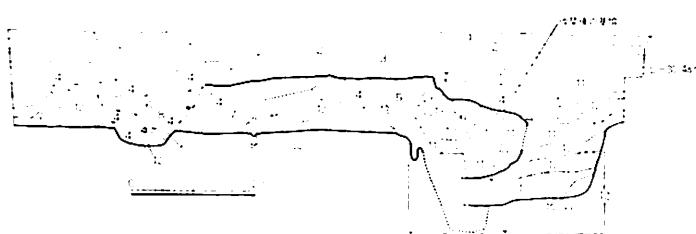
基壇部の改築は推定中軸線から西側に約50mの位置に設定した4トレンチで発見された。すなわち、第1次の回廊基壇はその南側に上面幅で3.2m、地山上面からの深さ1mの溝をもっているが、その溝が埋った（あるいは埋めて）段階で埋った土をつき固め、その上に黄褐色粘質土を版築して新たに基壇をつくっている。そこで新しい基壇はもとの溝の中央付近まで約2mほど南側へ移動したことになる。新しい基壇部の幅はおよそ5.4mとみられ、北側に幅1.5mの溝を設けている。また改築後の基壇上南側（もとの溝の埋めた部分）からは直径40cmの柱穴が検出された。

この回廊基壇の改築については不明な点が多い。西側へは南門付近まで続いて行なわれ

ているが、東側のトレンチではまったくその形跡はない。改築後の基壇の方位



回廊関係トレンチ配置図



回廊第4トレンチ東断面実測図

はやや北側に振れる。したがって、本来回廊基壇として改築されたものかどうか疑いが残る。

回廊東南隅の調査は、住宅密集地でしかも回廊部分が東西に走る幅2mの道路としてほぼ踏襲されているため調査地点の設定に苦慮した。したがって、調査で確認することができたのは回廊東南隅にと

もなう溝跡であって、回廊基壇に沿って東西方向から南北方向へと曲る状態が認められた。溝幅は南側で3.8m、現地表からの深さは1.7mある。溝中には瓦・土器類の落ち込みはほとんどなかった。

回廊溝の東南隅の調査によって中門を通る回廊の状況がしだいに明らかになりつつあるが、先にみた4トレンチにおける回廊基壇南側の溝とこの東南隅溝とを結ぶと昨年度調査した6トレンチの基壇端はこの線より約2mほど北側へ入ってしまう。したがって、この3つのトレンチで検出した基壇端の状況が当初のままであるならば、中門付近で回廊基壇が南側のみ、やや内側に入り幅を減少していることになる。

回廊東北隅にあたる地点の発掘は、現薬師堂（推定金堂跡）から東側に約65mのところにある水田に東西15m、南北8.2mの調査区を設定した。この調査区の発掘に先立ってこれより北38mの位置に設けたトレンチによって西側溝に対応する溝遺構を確認していたので、ここでは回廊東北隅およびこれに隣接する東側溝を想定して発掘を進めた。しかし、



回廊東北隅付近の溝跡（西より）



回廊溝東南隅（東南より）

調査地が薬師堂地区境内のレベルに比べ1.6mほど低いうえに水田ということもあって結果的に回廊の遺構はまったく遺っていなかった。発見した遺構は南北方向の溝状遺構で3条ある。このうち中央部およびその東側の溝跡は同一の性格の溝とみられ、礫にまじって軒先瓦破片なども出土している。これらはおそらく東側溝の痕跡とみられる。

(3) 塔 東 畑

回廊に囲まれた旧境内のなかで中軸線に対し塔の対称位置を調査では便宜上「塔東畑」とよんで、第1次調査でも小トレンチによる発掘を行った。これまでの調査を通じて判明しつつあるように回廊で囲まれた部分の広さは中軸線以東だけでも東西約70m、南北約90mもあり、この空間に金堂ないしはこれに匹敵するような建物の存在する可能性が十分考えられるところである。

第1次調査ではトレンチの一部で遺構らしきものが検出されている。それは、深さ30cmほどの耕作土直下（地山直上）にごく薄い固められた層があつて一部に扁平円礫を並べた状態の遺構である。しかし、この遺構については次のような理由によって必ずしも国分寺とかかわりのある遺構とみることはできない。まず、遺構が耕作土直下ということもあって出土物にごく新しいものを含んでいるうえ、古瓦等の出土がほとんどない。また、固められた層のある範囲もごく狭いうえ並んだ扁平円礫の方向が伽藍方位と少々ちがうなど、発掘の所見は、かつてこの畑が住宅であったという伝えと合わせて、当地に大規模な建物を考えられるかどうか、確定できない状況であった。

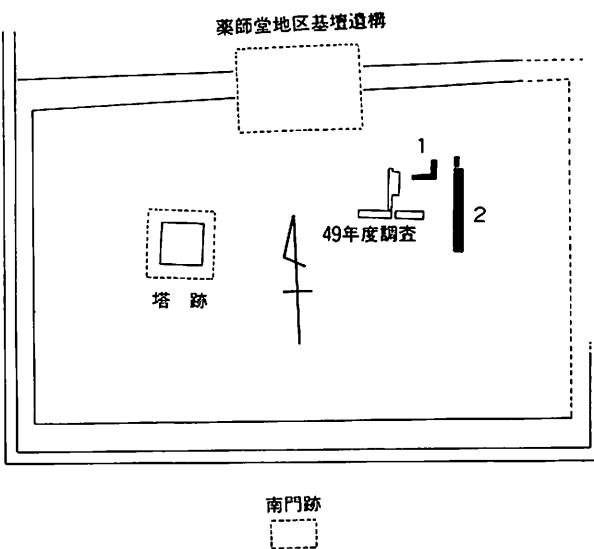
第3次調査では、1次のトレンチがやや中軸線に寄りすぎていたことを考慮して約15mほど東側とその中間位置にトレンチを設定した。発掘の結果は地点によってさまざまの様相を示していることがわかった。すなわち、1トレンチでは約1.4mの深さ掘り下げて一部に大形礫を投げ込みその上を版築しており、薬師堂地区基壇遺構の掘込み地業に似た状況を呈していた。版築は回廊掘込み基壇や塔跡基壇などのように固く叩き締められたものではない。最も深いところから数点の瓦片が発見された。また、版築の行なわれた掘込みはゆるい傾斜で西側に向って上っていっていることがわかった。つぎに、2トレンチでは北端・中央部・南端とそれぞれ異り、北端では深さ1.4m以上におよぶ大形礫の投げ込みがあり、それに近世以後の陶磁器類が混入していた。中央部は場所によってやや違うが深さ30~60cmの間が版築されて一部に根締石様の遺構が発見された。南半では、一部にトレンチ中央部でみた版築が搅乱されて造っているところもあるが、版築は調査区の南端まではもともとおよんでいなかったとみられる。トレンチ南端に近い部分で深さ75cmのところから一括して埋めた状態で

近世～近代の陶磁器類が大量に出土した。また、さらにつきこの位置より2mほど東側を試掘したところ深さ30cmほどの耕作土直下に地山があつて、版築等の行われた形跡はなんら認められなかった。

以上のような状況からみて、ここにある規模をもつ

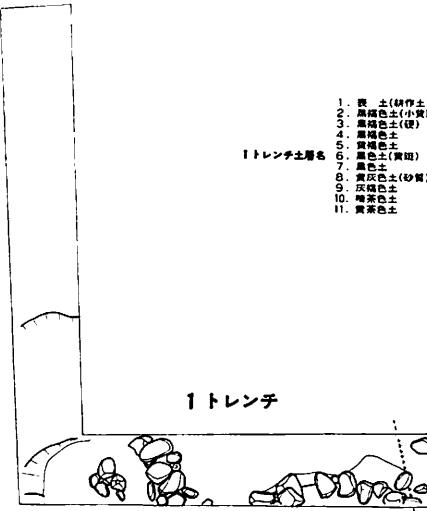
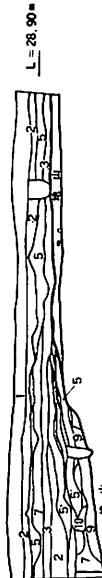
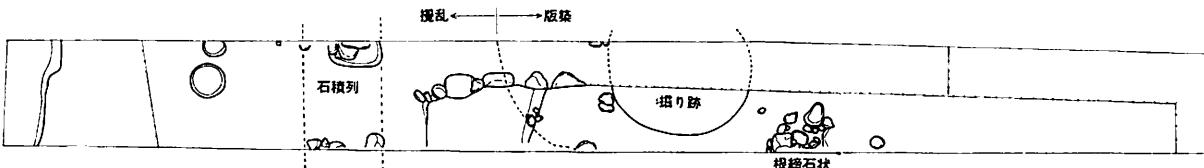


塔東畑トレンチの版築土層

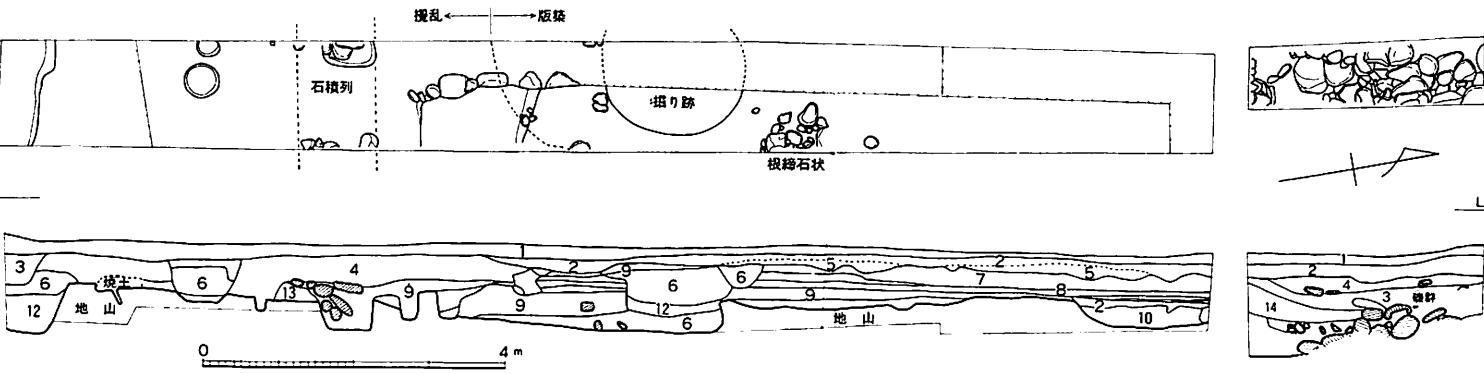
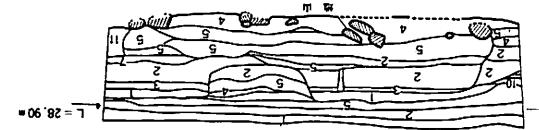
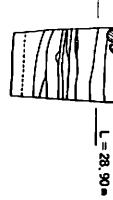


塔東畑発掘区トレーンチ配置図

1. 黄土(耕作土)
2. 黄褐色土(砂質)
3. 黄褐色土(粘質)
4. 黄褐色土混入暗褐色土
5. 黄褐色土混入暗褐色土(硬・粘質)
6. 黄褐色土混入暗褐色土
7. 黄褐色土(砂質)
8. 黄褐色土(粘質)
9. 黄褐色土
10. 黄褐色土(砂質)
11. 黄褐色土(粘質)
12. 淡黄色土(砂質)
13. 黄褐色土混入暗褐色土(硬)
14. 暗褐色土混入黄褐色土(粘質)



1. 黄土(耕作土)
2. 黄褐色土(小葉樹)
3. 黄褐色土(硬)
4. 黄褐色土
5. 黄褐色土
6. 黄褐色土(黄斑)
7. 黄褐色土(砂質)
8. 黄褐色土(粘質)
9. 黄褐色土
10. 黄褐色土
11. 黄褐色土



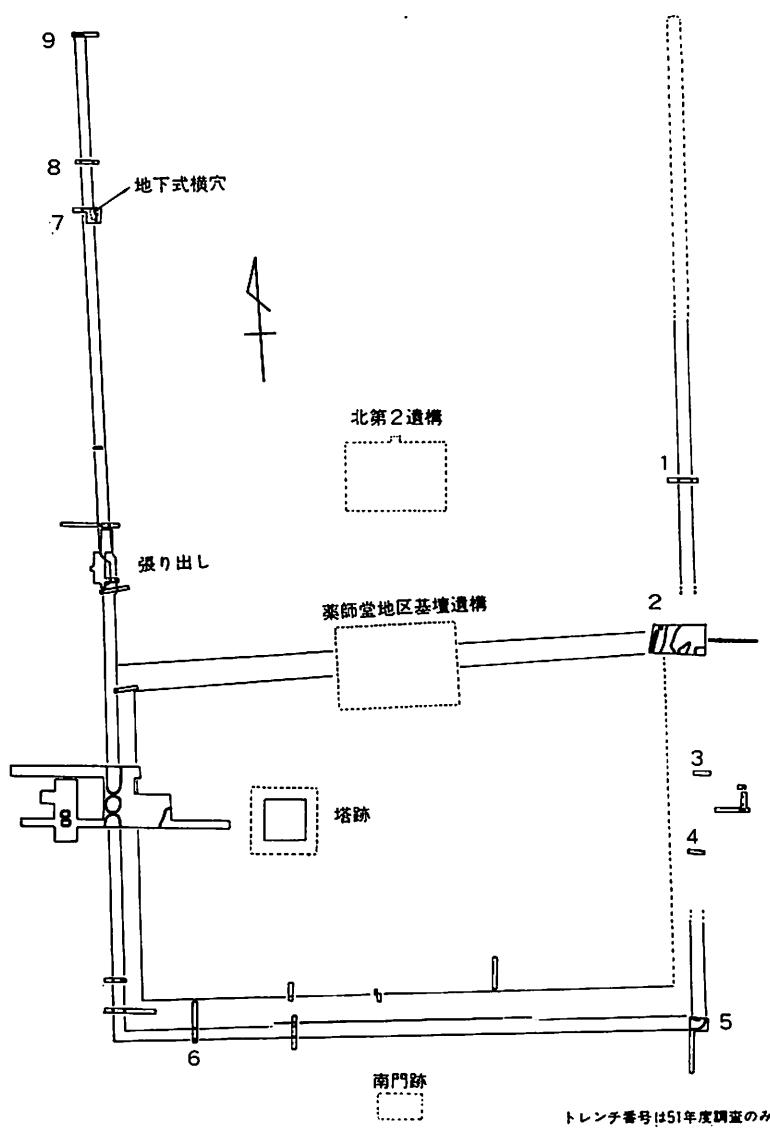
た遺構を想定することができる。瓦片が入っていたことから、国分寺に属する堂宇として計画、着工されたものであることは疑いない。ただし、堂宇の性格および果して建物が完成したものかどうかは疑問の余地がある。

(4) 溝 跡

第1～2次の調査を通じて西側回廊に接して幅約4mの溝があることがわかったが、南北の方向にどこまで続くのかその限界が不明であった。また、東側対称位置にも同じ溝があるのかどうかを調べるために10ヶ所にトレンチを設定した。このうち、2・6トレンチでは回廊の調査をも兼ねている。その結果、西側では南に設定した10トレンチまでは延びていないことが

確認され、東側の結果とも合わせて回廊外側をとり閉む形で掘られているといふことが明らかとなつた。

一方北側の限界については、9トレンチにおいてまさに西側の北端をおさえることができたので南北294mにおよぶ溝がここで判明した。またこの西側北端に接して直徑90cmの掘立柱跡が発見されている。溝につづく北側の境界を形成する門跡あるいは柵などの遺構の一部とみられるが発掘部分が狭いため明らかではない。



溝跡関係トレンチ配置図

東側では回廊の東南隅（5トレンチ）および北に上って1トレンチによって確認されているので、本来通して掘られていたものとみられる。したがって、回廊東北隅にあたる位置の発掘区において発見された溝底の痕跡とみられる遺構も約7mほど中軸線寄りにあるが、東側溝の一部とみるべきであろう。東側溝の北端部については現在住宅地となっており確認することはできなかった。

ところで、西側溝遺構はきわめてよい状態で残っていたのに対し、東側ではとくに中央付近においてかなり遺構面の削平を受けていることが確認されたが、これは地形条件と薬師堂が東正面となって、東側からの往来が頻繁になったことが理由の一つとしてあげられよう。

(5) その他の遺構

堅穴状遺構

西門遺構の西北にある深い掘込みの遺構である。大きさは南北3.5m、東西3.6mの隅丸方形を呈し、壁は地山を30cmほど掘込んでなだらかなカーブを描いて立ち上る。内部に焼土や柱穴は存在しない。また底面は凹凸が多く一部によく固められたところがある。底面についた遺物はなく、中央部での厚さ50cmの黒色土のレンズ状堆積があってその上に礫が投げ込まれたように中央付近に集中していた。礫にまじって数点の瓦片があった。また堆積土層中に若干の木炭が検出された。



この遺構の性格やつくられた時期については不明な点が多い。西門とそれに連なる南北の柵列を想定した場合、この遺構は位置的にやや西側のほとんど柵に接するほどの位置にあたっており、この付近には2次調査の結果と合わせて木炭の入った小形の深い掘込みが3ヶ所発見されている。また、緑釉陶器も2次および3次で発見されている。いずれも柵列を想定した場合それよりやや西側であるが、ある時期の寺域内における生活空間の一部とみることができようか。

不定形大形土壙

西門遺構の発見された発掘区の東南の一角を占める遺構である。一部分だけの発掘であったため全体の形がどのようなものになるのか不明であるが、南北8m以上および黄茶色ロームを深さ1.3mほど掘り下げている。掘り方斜面には直径20cmくらいの大きさの柱穴もいくつかみられる。また、この土壙と関係があるのかどうか不明であるが土壙際において緑釉陶器底部が発見された。土壙の堆積土層は一部に黄色土の水平層がみられるもののほとんどが黒褐色のいわゆる火山灰土と呼んでいる土である。

ところで、今回調査したようなローム層の深い掘込みは2次調査でも塔の東側で2ヶ所知られている。どちらも内部にはまったく遺物はなく、黒色土層が堆積しているだけという状況であった。現在のところこれらのうち一つとして遺構全体を掘りあげていないの

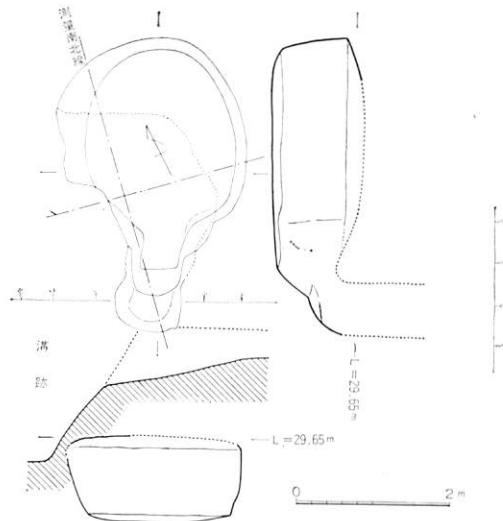
で、このような深い土壙がどのような目的で掘られたものかまったく推測の域を出ないが、一つの見解として基壇構築や整地につかうロームの採取地および排除した軟弱な黒色土の捨て場所として使われたのではないかと考えている。

地下式横穴

西側溝造構の探索中に発見されたもので、溝造構と切り合っている。（位置はP.11 溝跡関係トレンチ配置図参照・7トレンチ）

玄室平面の形は奥部がやや広がったいわゆる卵形につくられ、主軸の方向はN30°E、主軸長2.9m、最大幅2mである。また床面の現地表面（水田）からの深さは2.9mであり、黄茶色のローム層を深さ約2.2m掘込んでいる。天井部はほとんど陥没していたが、復原すると横断面の形は天井推定高1.2mの蒲鉾形となる。この玄室の一方

垂直に掘られた入口部がつくのであるが、大部分溝の掘さく時に破壊されてしまっている。したがって、入口閉塞の構造についてはいっさいわかっていない。垂直部から玄室に入るには緩傾斜の階段状の段を1段降りなければならない。玄室内部は天井部を構成し



地下式横穴実測図



地下式横穴 (西南より)

ていたロームやその上部を覆っている黒色土によって埋没しており、上部には溝掘さく中の陥没部を埋めるために栗石が投げ込まれていた。横穴の埋土中には瓦片や土師器片が数点混入していたがもちろんこの横穴に伴う遺物ではない。

この種の地下式横穴は県下では、中津市（福島地下式横穴）、武蔵町（宮西地下式土

壙）、安岐町（中の川地下式土壙）、杵築市（大内地下式土壙）、臼杵市（門前地下式横穴・小五郎地下式横穴）、直入町（長湯地下式土壙）などが知られているが、多くの場合遺物がなく、また中には五輪塔などが祭られているものもあってその営まれた年代がはっきりとわかっていない。当国分寺境内で今回発見された地下式横穴も遺物の発見がなかったということではこの例外ではない。しかし溝造構との切り合いからみて溝の掘られた年代より古いということはいうまでもないが国分寺創建以後、境内にそのような墓を築くことは

まず考えられないことから、一応下限の時期を国分寺の創建以前におくことができよう。

(6) 遺 物

今回の調査は周辺部が主体であったため出土した遺物はごく少い。ここでは東地区の溝造構から発見された軒先瓦について解説しよう。

軒丸瓦はこれまでの調査を通じて五型式が発見されており、今回このうち1～4類としたものがある。

第1類（1・2） ……珠文縁複弁11葉文の軒丸瓦で当国分寺の瓦では最も古いとされる。中房には1—8の蓮子を配す。径約16cm。

第2類（3） ……細弁化した單弁24葉文軒丸瓦で復原径約20cm。中房は1—8の蓮子を配し、蓮弁の周間に蓮弁間に各1個あて珠文を置く。外側に太い界線がある。

第3類（5） ……第2類をさらに線状化したものである。蓮子の配置は1—8、蓮弁は42を数えその外側に珠文をめぐらす。珠文の外側に界線を施すものとないものがある。復原径18.5cm。

第4類（4） ……珠文縁複弁8葉文の軒丸瓦である。前回の資料によれば、中房には円窓のある蓮子を0—4—8と配し、蓮弁の輪郭線が花弁全体を縁どる太い園線として描かれ、蓮弁は梢円形の盛り上りのある素弁である。復原径約17cm。

一方、軒平瓦はこれまで太宰府系老司式軒平瓦の系統を引く扁行唐草文軒平瓦（第1類）と均正唐草文軒平瓦（第2類）とが出土しているが、今回の調査では前者の小破片が2点（6・7）発見されたにすぎない。

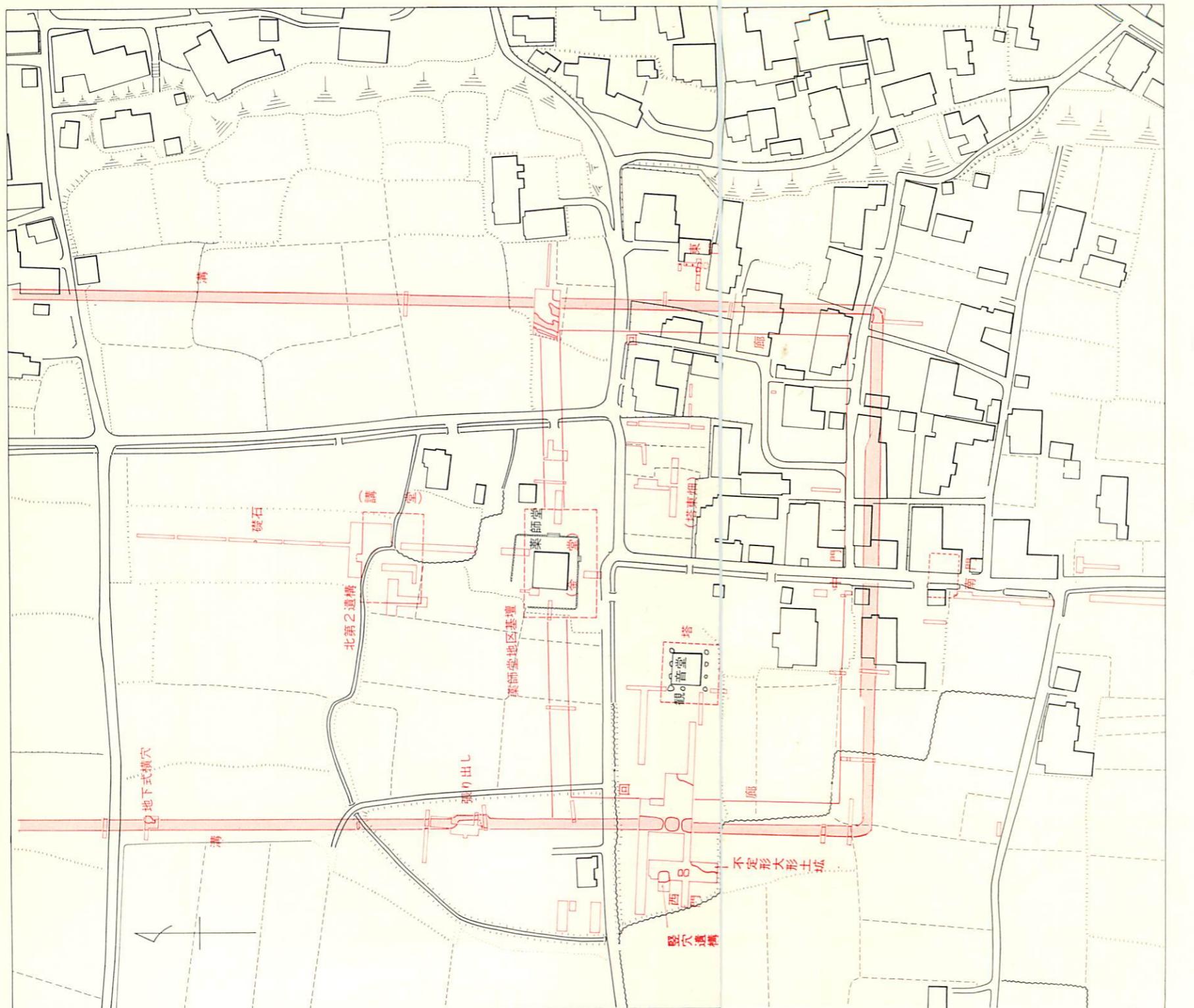


軒丸・軒平瓦拓影（4は東1—1トレンチ出土、他は東1—2トレンチ出土）

III ま と め

最後に簡略にこれまでの調査成果の概要を要約すれば次のようになろう。

1. 四至については現在のところ、東西が東門および西門によって判明した距離 $182m$ 、南北が南門から溝（西側溝）の北端までの距離 $314m$ を測る。東門の調査によってわかったように東西南北の門を結ぶ柵が存在したことが考えられる。
2. 東西の門は塔中心を結ぶ線上に位置し、回廊外側の溝からそれぞれ $9m$ の距離にある。
3. 回廊は薬師堂地区基壇遺構（推定金堂跡）にとりつき塔をとり囲む。これに囲まれた範囲は東西約 $150m$ 、南北約 $90m$ である。回廊内の塔の対称位置には大規模な建物が存在した形跡はみられない。
4. 現在薬師堂の建っている場所には東西約 $32.5m$ 、南北約 $22m$ の規模で基壇下の掘込み地業がなされている。（薬師堂地区基壇遺構、推定金堂跡）
5. (4)の北方約 $30m$ の位置に東西約 $28m$ 、南北約 $18m$ の基壇が存在する。（北第2遺構、推定講堂跡）
6. (5)の北方約 $30m$ 付近に性格不明の礎石 1 個が存在する。（第3遺構）
7. 塔跡は 1 辺 $18m$ の基壇をもち、基壇周囲の化粧は栗石積みである。安定した礎石の配置から推定される南北方向方位は N $10^{\circ}11' E$ である。（前回概報の方位訂正）
8. 塔跡の東方 $60m$ 付近にも、掘込み地業がなされており、回廊内に塔と相対して堂宇が計画されたものと考えられる。
9. 回廊基壇の外側に接して大溝があり、北側に開いた「コ」字状を呈し南北長 $294m$ を測る。
10. 南門跡は推定金堂跡の中心から約 $120m$ の位置にはば内接する。



豊後国分寺跡昭和51年度調査概略図 (49. 50年度発掘地を含む)

豊後国分寺跡

昭和51年度調査概報

昭和52年3月31日

発行 大分市教育委員会

大分市今津留 1213-179

印刷 明治印刷 K K
